

## 論文の内容の要旨

論文題目           近代韓国語における日本語の影響  
                          —文章における影響を中心に

氏 名               朴 宣 映(パク サンヨン)

本研究の目的は、近代韓国語の文章における日本語の影響を検証することである。19世紀末、韓国語は日本語との接触により、文章表現において大きな影響を受けた。本稿ではその影響の具体的な例として、「-에 對하여(ey 對haye)」、「-에 依하여(ey 依haye)」、「-에 있어서(ey issese)」、「-에 있어서의(ey isseseuy)」の4つの後置詞表現をとりあげ、その生成・定着過程を歴史的に考察し、文献の用例をもって日本語の影響を検証した。

個別表現の検証に入るまえに、本論ではこれらの後置詞表現に対する日本と韓国の先行研究をながめたうえで、研究対象にした理由についてのべた。それはまず4つの表現が近代以降、生成された後置詞表現のうち、初期に属するものとして、近代韓国語の「後置詞」表現の生成における日本語の影響を検証することができると思われるためである。次に後置詞表現の生成における日本語の影響を考察することにより、近代韓国語の文章に影響を与えた日本語表現の特徴を知ることができるためである。以下、個別表現について影響関係を考察した。

第1章では後置詞「-에 對하여(ey 對haye)」における日本語「-に對して」と「-について」の影響関係について考察した。現代韓国語の後置詞「-에 對하여(ey 對haye)」は、現代日本語の後置詞「-に對して」と「-について」と意味用法がほぼ一致しているが、本稿の調査による

と19世紀末の文献から「-에 對하야(ey 對h@ya)」の形で使われ始める。この「-에 對하야(ey 對h@ya)」の生成が韓国語の内部における独自のな変化の結果であるか、それとも中国語の影響によるものなのかを調べたが、考察の結果、その可能性は低いと考えられた。ただし、19世紀末における「-을 對하야(ul 對h@ya)」の後置詞用法の例は、韓国語の内部に後置詞生成の可能性が潜在していたことを示すものと考えられる。そしてその可能性があったからこそ、日本語の後置詞の影響をさらに容易に受け入れることができたと思われる。日本語「-に対して」、「-について」の影響は、(1)格助詞の変化、(2)新しい意味用法—「関連対象」、「内容表示」、「割合の基準」の表示用法をもつこと、(3)用例が一部の日本関連の文献に集中して見られること—この三つの点から検証を試みた。

第2章では後置詞「-에 依하야(ey 依haye)」における日本語「-によって」の影響を考察した。両者は互いにその意味用法が類似しており、筆者の調査によると、19世紀末から「-에 依하야(ey 依h@ya)」の形で文献に見られはじめる。元来、動詞「依하다(依h@ta)」は対格助詞「을/를(ul/lul)」をとり、「依拠する」、「依存する」などの意味を持つ本動詞であったが、19世紀末から「-에 依하야(ey 依h@ya)」形で後置詞として使われ始める。生成初期においては、従来の本動詞と同じく対格助詞「을/를(ul/lul)」を取る「-을 依하야(ul 依h@ya)」の形も使われるが、1920年代以降から現代のような「-에 依하야(ey 依haye)」に定着している。

19世紀末に生成した後置詞「-에 依하야(ey 依h@ya)」の意味用法は、本動詞の意味用法と類似した「依拠」のほか、「原因・理由」、「手段・方法」、「条件」、そして受身文の「動作主」を表すなど、新しい意味用法をもっており、これらは日本語「-によって」の意味用法とほぼ一致している。中でも「条件」を表す用法は、20世紀初めに一時的に使われ、現代韓国語では使われないものである。また受身文の「動作主」表示用法は、近代以降、西洋諸語の翻訳によって生成された日本語の「-によって」の用法が再び韓国語「-에 依하야(ey 依h@ya)」に受容された可能性が極めて高いと考えられる。筆者の調査によると、19世紀末における後置詞「-에 依하야(ey 依h@ya)」の例は、『官報』と日本留學生の雑誌に集中して見られ、19世紀末の後置詞「-에 依하야(ey 依h@ya)」の生成過程に日本語「-によって」が影響を及ぼした

可能性が高いことがわかった。

本章では19世紀末の後置詞「-에 依하어(ey 依haye)」の生成における日本語の影響を、(1)格助詞の変化、(2)本動詞にはない新しい意味用法、特に「条件」、受身文の「動作主」表示の用法、そして(3)文献における用例の偏りをもって検証した。

第3章では後置詞「-에 있어서(ey issese)」の生成における日本語の後置詞「-において」の影響を考察した。現代韓国語の後置詞「-에 있어서(ey issese)」は日本語の後置詞「-において」とその意味用法が一致し、筆者の調査によると19世紀末から「-에 잇서(ey isse)」、「-에 在하야(ey 在h@ya)」の形で文献で使われ始める。これらの表現は、19世紀末以前の漢文の介詞「在」の直訳による「-에 이서(ey isye)」、「-에 在하야(ey 在h@ya)」と形態的に類似するが、先行詞の種類、意味用法、文の構造において、かなりの相違が見られる。「-에 이서(ey isye)」の場合、先行詞は主に場所名詞が使われ、「主語+場所名詞+ey isye+述語」の構造をもち、「主体の所在」を表していたが、19世紀末の「-에 잇서(ey isse)」と「-에 在하야(ey 在h@ya)」の場合は、主語が明示されず、抽象名詞の先行詞も取り、「動作・作用の時間・場所・範囲・条件」などを表している。「-에 잇서(ey isse)」、「-에 在하야(ey 在h@ya)」は先行詞、意味用法、文構造において、日本語「-において」と類似しており、さらにその生成初期の用例が日本関係の文献に集中していることから、日本語「-において」の影響を受けて生成された可能性が高いことが明らかとなったと言える。

最後に第4章では後置詞「-에 있어서(ey issese)」の連体修飾形の「-에 있어서의(ey isseseuy)」の生成における日本語「-における・おいての」の影響を検証した。「-에 있어서의(ey isseseuy)」は後置詞「-에 있어서(ey issese)」と属格助詞「의(uy)」の複合表現であり、日本語の「-における・おいての」と意味用法が一致している。韓国語の属格助詞の複合表現についてみると、歴史的に一時衰退していったが、20世紀初から再び使われ始め、日本語の属格助詞の複合表現と、直訳できるほど類似している。「-에 있어서의(ey isseseuy)」の例は、1920年の日本留学生の雑誌から見られはじめ、1930年代には日本語「-における」の

翻訳に「-에 있어서의(ey isseseuy)」が当てられている。それ以前までは「-における」の翻訳に、「-에 在한(ey 在h@n)」、「-에 於한(ey 於h@n)」など、従来にない新しい表現が作られ、「-에 있어서의(ey isseseuy)」が定着するまで使われた。従って日本語「-における」の意味用法が韓国語の中に受け入れられ、「-에 있어서의(ey isseseuy)」の生成に影響を与えた可能性が高いと考えられる。

以上、4つの後置詞表現の生成・定着の過程を歴史的に考察し、その過程における日本語の影響を文献の用例に基づいて考察した。考察の結果、これらの後置詞表現は19世紀末から文献に使われはじめ、その意味用法、形態などが日本語の後置詞表現とほぼ一致していることがわかった。さらにその生成過程において、同様の特徴—(1)格助詞の取り方の変化、(2)新しい意味用法の出現、(3)文献における用例の偏りなどが共通して見られ、近代韓国語の文章に後置詞表現が生成する過程において、日本語の後置詞表現が影響を与えた可能性が極めて高いことがわかった。

また近代韓国語の文章における日本語の影響の特徴として、漢文訓読と西洋諸語の影響をうけた日本語表現が多いこと、そして日本語における西洋諸語の影響と異なり、外国語すなわち日本語の学習過程による受容でなかったことを示すことができた。このような特徴をもつ、近代韓国語における日本語の影響は、近代韓国の政治、社会的な要因、また言語的な要因が複合的に作用した結果であると考えられる。中でも19世紀末、韓国語にいわゆる「開化期の国漢文体」が生成される過程と後置詞表現の生成過程は密接に関わっていると思われ、今後さらに研究する必要があると思われる。

本研究は、近代韓国語の文章における日本語の影響を検証する一つの出発点として位置付けられるものであると思われる。今後、研究対象を拡充していく一方で、個々の表現についてさらに詳細な歴史的な考察を行い、その意味用法の分析と、類似した用法をもつ既存表現との相互関係も考察する必要があると思われる。以上の課題を解決しながら、今後、近代韓国語の文章における日本語の影響を具体的に調査・検証していきたい。